



Weather and headache onset: a large-scale study of headache medicine purchases

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2016-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾関, 佳代子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3016

論文審査の結果の要旨

慢性的な頭痛患者における頭痛発作出現と天候の変化との関係は経験的によく知られているが、一定の見解は得られていない。申請者らは、大規模ドラッグストア網を対象としてロキソプロフェン(loxoprofen sodium hydrate; LOX)販売量を頭痛の発症、悪化の指標とし、各種の気象因子との関連を解析した。

2011年4月から2012年3月までの静岡県西部地域ドラッグストア52店舗におけるLOXおよび一般用(over-the-counter; OTC)医薬品の売上高を収集し、休日など他要因によるLOX売上高の変化を補正するため、OTC医薬品売上高に対するLOX売上高の日ごとの割合を算出し、主なアウトカム因子(LOX daily sales proportion; LDSP)とした。気象データは気象庁ウェブサイトより入手した。また2012年12月の1週間、LOXの購入者全員を対象に、購入理由や購入時の症状等をアンケート調査した。本研究の対象となったLOX販売量は年間数十万錠であり、対象人数は延べ数万人であった。LOXの購入理由の症状の過半数は頭痛であり、約8割が症状の発症に関連した。LDSPと有意な正の関連を示した購入当日の気象因子は、降水量であり、最高気温、日照時間、平均気温は、有意な負の関連を示した。LDSPが有意に高かったのは、購入前日に比して購入当日の平均気圧が低下した場合、また降水量、平均湿度、最小湿度が上昇した場合であった。季節を調整したモデルでも、気圧の低下、降水量上昇、平均湿度上昇、最小湿度上昇はLDSPが高いことと有意に関連していた。

審査委員会では、数十万錠の鎮痛薬の販売量というビッグデータを活用し、気象情報を組み入れた解析を行うことで、頭痛と気象の関連を明らかにした点を高く評価した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者	主査	渡邊 裕司	
	副査	梅村 和夫	副査 前川 真人